

「恵みの約束」（マタイによる福音書20章1～16節）171008 弓町本郷教会

「良心の全身に充満したる丈夫（ますらお）の起こり来たらん事を」。弓町本郷教会の初代牧師海老名弾正牧師が学びました同志社の創立者新島襄の言葉です。この言葉は、同志社卒業後、銀行家、ジャーナリストとして活躍しました横田安止（よこたやすただ）に宛てられた手紙の中に書かれた言葉です。

手紙が書かれたのは新島襄が亡くなる2ヶ月前のことです。この手紙を書いてから新島襄は、大学設立の支援を訴えるため東京、また群馬県前橋へと向かいますが、病が重篤な状態になり、神奈川県大磯で地上の命を終わるのでした。1890年、弓町本郷教会が創立されて5年目のことでした。

横田安止に宛てられた手紙では、自分は体調が良くないけれども、すでに乗り出した船である、いかなる暴風が襲い来ても二度と帰ることはない、ただ私は向こう岸に到達することを知っている、途中で沈没するとしても恐れることはないと言っていました。

そして、ますます良心が全身に充満した青年が現れることを願っている、細かい規則はあるかもしれないけれども、学生たちがなごやかになり、自治と自由の風が吹き渡ることを願っていると語り、自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳と結ばれています。

教育の場にも、教会にも、自治と自由の風が吹き渡ること、そこに集う人々がなごやかであることを願っていたのでした。

新島襄は誰よりも「良心」を高く評価しました。幕末に出国し、9年間におよんだ欧米での生活を通して、キリスト教が文化や国民に与えた精神的感化がいかに大きなものであるかを受けとめて帰国しました。そのひとつが「良心」です。信仰における「良心」は、ただ道徳的な意識ではありません。信仰によって与えられる「良心」とは、人間の視点ではなく、神様の視点、神様が見ておられることを意識して初めて芽生えるものなのでした。

イエスのたとえ話から、神様は私たちをどのように見ておられるのかを知らされませぬ。

聖書の中でぶどう園にぶどうが豊かに実ること。それは、神様の民が豊かに祝福されていることをあらわすものでもあります。この豊かに実ったぶどう園で人が働くこ

と、それ自体喜ぶべきことでありました。そして、このたとえ話の中では賃金という形でその豊かさにあずかるということも、ふさわしいことであり、それが約束されているのでした。

夜明けから一番に働き始めた人、9時、12時、3時、5時と、いろいろな時間から働き始めた人がいます。神様がなさった約束はひとつだったのですが、やがて、その約束が違ったように受け止められていきます。

同じ働きをしたのならば、働いた時間の長さによってその報酬が違うということは、私たちにとっては当然のことと考えられます。そう考えておりますと、まず最後に来た者たちに賃金が払われます。それは最初に働き始めた人たちに約束されたのと同じ1デナリオンでした。何と気前の善い主人だ、5時から夕方までという1時間しか働いていないものに1デナリオンをくださった。それなら、夜明けから働いている私たちはいくらいただけるのだろう。そう期待するのは、当然といえば当然かもしれません。

そこで、夜明けから働いていた人たちに渡されたのは約束されていた1デナリオンでした。どういうことですか、と言いたくなるのも当然かと思えます。しかし、ぶどう園の主人は、これはあなたと約束したとおりですよと、恐らく涼しい顔をして言うのでした。

確かに、ぶどう園の主人は、夜明けから働いた人に不当なことはしておりません。約束をしたとおりのことをしているのでした。そして、そのことを、働く時間の短かった他の人たちにも同じようにしたいと、そう考えたということでありました。

1デナリオンとは、当時の人たちが一日を過ごすのに必要な生活費と言われていません。夜明けから働いた人が1デナリオンをもらって、5時から働いた人が10分の1デナリオンをもらったとしたら、夜明けから働いた人も文句はなかったかもしれません。しかし、それでは5時から働いた人は一日を生活していくことができないのでありました。

ぶどう園の主人は、長く働いた人にも、働く時間が短かった人にも、その人が一日を生きていくのに必要なものを渡したいと思ったということでした。

夜明けから働いた人と5時から働いた人とは何をあらわすのかということは様々に受けとめられることと思えます。人生の長さという見方もあるかもしれません。人生における仕事量と見るかもしれません。あるいはまた、人生のどのような時期に信

仰生活を送るようになったかということと見られるかもしれません。

しかし、信仰生活が長いものは、短いものよりもたくさん神様の恵みを受けるのでしょうか。あるいは、受ける恵みが一緒ならば、長い間信仰生活を送ると損をすることなのでしょうか。

そうは思えません。信仰の歩みをすすめるということ。それはその歩みそのものが恵みの時であるのであります。そこからさらに何かの恵みをいただくかどうかということ。それは、ただ神様の御心のままにあることなのです。

この世で働くということは、同じように見ることはできないのかもしれませんが。働いて報酬を得るということには、それがどういう働きであるか、どれだけ働いたかで違ってくるといふことがあるのでしよう。

ただ、それぞれが召された業、召された歩みには、優劣は付けられません。多くの人から注目される働きもあると思います。人知れず働く働きもあると思います。ただ、どちらも神様が見ておられるのです。私たちの歩みは、いつも神様に見られている、そして神様は私たちにふさわしい歩みを与えてくださり、それを誠実になすようにと召してくださるのです。そして一人一人に恵みの約束を与えてくださいます。このことを受けとめるのが「良心」です。

「良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらんことを」

この言葉が示す歩みがあるのです。私たちのことを神様が見ていてくださる、そのことを信じて、それぞれの歩みをすすめたいのであります。

京都市左京区鹿ヶ谷若王子に同志社墓地というところがあります。同志社の創立者新島襄をはじめとして、新島八重、山本覚馬、徳富猪一郎、また、同志社関係の宣教師たちが葬られている墓地です。

この同志社墓地の入り口近くに松本五平さんという人のお墓があります。松本五平さんという人は、信州の出身で本名は宗之（むねゆき）というのだそうです。松本五平さんは、同志社の初期の「校僕」、学校の僕といわれた人でした。学校の用務をする職員です。

松本五平さんは、新島襄を尊敬し、永遠に新島襄のもとにいたいと希望して洗礼を受けました。また、死んでも新島襄の「墓守」になりたいと願ったのでした。

松本五平さんはユーモアに富んだ伝説的な人でした。英語がしゃべれないのに、英語だといって、わけのわからない言葉で演説のまねごとをしていたそうです。そのせ

いかわかりませんが、生徒たちから「五平」「五平」と呼ばれて、からかわれていました。

しかし、新島襄は松本五平さんに対しても「五平さん、用事をお願いします」と丁寧に用事を頼んでいたのです。松本五平さんに対して、「五平さん」といったのは新島襄だけだったのです。

五平さんは新島襄を尊敬し、洗礼を受けました。そして、学生に呼び捨てにされると、「お前たちは学がないから呼び捨てにするんだ。新島先生を見習え」と言っていたということです。

五平さんは新島襄が死んだ後も同志社で働きましたが、やがて、五平さんも病気で床につきました。五平さんは自分の命が長くないことを悟って、死んでも新島襄の近くに行きたいと願ったのです。

五平さんは人を介して、新島八重に頼みました。「私が死んだら、どうぞ新島先生の墓の門の外に埋めてください。死んだ後も新島先生の門番をしとうございます」と頼んだのです。すると、新島八重は「あなたが亡くなったら、門の外ではなく、内に葬りましょう」と約束しました。それを聞いた松本五平さんは心が安らかになったということでした。松本五平さんという人、社会的には無名の人であったかもしれませんが、けれども、新島襄の良き協力者であり、間違いなく大切なご用を果たした人でありました。

この世の中では、多くの人から注目されること、あまり目立たないこと、確かにその違いはそれぞれあります。それでも、私たちひとりひとりが、大切な人生の務めを与えられているのであります。だれからも見られないかもしれない、だれもほめてくれないかもしれない、そのひとつひとつが大切な主のご用であるのです。そのことを重要であるとか、そうではないとかということとはできないのです。

ヘブライ人への手紙 11章にこう書かれております。「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです」。「だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませぬ。神は、彼らのために都を準備されていたからです」。

この世にあっては報いを受けられないという生きざまがあります。失意の内にこの世の命を終わっていかねばならない人。もしかするとそういう人の方が多いのか

もしれません。

しかし、約束されたものを手に入れなかったとしても、はるかに望み見るだけだったとしても、私たちが今は仮住まいの者である、私たちのために天の故郷、都が用意されているということを感じてほしいと願います。

イエスは、私たちの働きの大きいか小さいかによらず、約束のものを備えてくださると語られました。長く働いたか、短い時間であったかによらず、約束を果たしてくださると語られました。

弓町本郷教会の創立131年という時を迎えました。多くの先達がこの教会の歴史を紡いでこられました。多くの人に知られる方もおられます。静かに信仰の歩みをなした方もおられます。それぞれの歩みを神様は見つめられ、御心にとめられ、御許に招かれるのです。

新しい時に向かって進もうとしております私たちも、主が私の歩みを見ておられる、主が共におられることを信じて、進み行くものでありたいと思います。

ペトロの手紙一1章3節以下の言葉をお読みいたします。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」

私たちが、この神様の恵みの約束に裏打ちされた歩みを進めてまいりたいと思います。